



Title	日本語学習者の話し言葉における不適切な指示詞の使用
Author(s)	阪上, 彩子
Citation	日本語・日本文化. 2010, 36, p. 27-44
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8819
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究論文〉

日本語学習者の話し言葉における 不適切な指示詞の使用

阪上 彩子

1. 研究の目的

日本語学習者の指示詞使用についての研究は活発に行われているが、多くは指示詞コ・ソ・アの選択についての研究（迫田 1993、1998；孫 2008 等）である。しかし、指示詞コ・ソ・アの要素以外にも、指示詞の省略や指示対象の繰り返しなどが原因で、次のように文や談話が分かりにくくなっている例がある（阪上 2003）。

- (1) ハンガリーと日本の文化は違う。だからそれはハンガリーでないところは、日本人ではどんなに普通のところだったら私にとってとてもそれはおもしろい、それを勉強したいと思いますね。（阪上 2003：76）

(1) は日本語中級レベルの学習者によって発せられたものである。文法上の間違いではないが、談話レベルでみると「それ」の使用が不適切であり、聞き手にとって分かりにくい。しかし、この「それ」を「これ」や「あれ」に変えても適切な表現になるわけではない。そこで本稿は、(1) のようにコ・ソ・アの選択以外の要素が原因となり不適切となる指示詞が、いかなる場合に学習者は使用するのか、その特徴を探ることを目的とする。そして教育現場でどう生かせばいいか提案したい。

2. 省略や繰り返しに関する先行研究

日本語学の分野では、指示詞について佐久間（1951）以来、指示詞のコ・ソ・アの要素のみの研究が続けられており、省略や繰り返しについては主題の省略など別個の問題として取り扱われている。しかしテキスト言語学¹⁾では、指示詞は

結束性の下位概念として考えられており、ほかの要素、省略（ゼロ照応、ゼロ代名詞を含む）、繰り返しも同時に考察されている。そこで、テキスト言語学での研究を含めた先行研究について、まず省略について、次に名詞句の繰り返しについてまとめた。

2.1 省略に関する研究

日本語の省略の研究については、主題の省略の問題として多数研究されている中で、砂川（2005）をとりあげる。砂川（2005）は、日本語母語話者に作成させた物語を分析しているが、「包括的な談話の主題の場合、省略によって示されることがあるが、局所的な主題の場合、指示対象の距離が近いときは省略されるが、遠い場合は指示詞か名詞句の繰り返しが用いられる。」と述べられている。また Hinds（1983）は、日本の物語、日本語のインタビューを分析した結果、主題以外でも指示対象が同定しやすい場合は省略で表すことを明らかにした。日英バイリンガル児童のナラティブについて分析した梶原（2006）は、トピック性の高い登場人物は英語のナラティブでは代名詞句で用いて表現され、日本語は省略する傾向があることを指摘している。

また、庵（1996、2007）は、「この・その・ゼロ代名詞」についてテキスト言語学の立場から考察している。庵（2007）は、日本語と英語の対照研究として、英語の定冠詞にあたる語が日本語ではゼロ代名詞が用いられると論じている。また使い分けについて、トピックとの関連性が低く、指示対象が顕著でない場合、「この・その」は用いられないと言及している。たとえば（2）の「ポスト」のような指示対象の場合、「テキストのトピック（「交通事故」）が形成するフレームの中で目立たない（顕著さが低い）ものであるため、「この」や「その」を用いると不適切であると述べられている。

- （2） 昨夜乗用車が国道 176 号線沿いのポストに接触しガードレールに衝突しました。この事故で乗用車に乗っていた二人は即死し、 ϕ ポストは根元から折れました。（庵 1996：77）

2.2 名詞句の繰り返しに関する研究

次に名詞句の繰り返しについての先行研究をとりあげる。まず Clancy（1980）は、日本語 20 名、英語 20 名のナラティブのデータをもとに指示表現を調査しており、

日本語も英語も、指示対象との距離が短く障害物がないときには、簡単な照応形が使われる傾向があるが、英語は同一名詞句の繰返しを避ける傾向があるのに比べ、日本人はごく自然に同一名詞句の繰返しを多用した者が多かったと報告している。また日本語についてではなく、日本人が書く英作文について考察したマッカーシー(1995)は、日本語は代名詞化よりも名詞句の繰返しを好む言語ではないかと推測している。

また物語文を考察している牧野(1983)は「代名詞を使うと、文脈上指示する人物が曖昧になるおそれがある場合は当然固有名詞を反復する」と述べている。また Kondo(2004)は、日本語学習者4名のあらすじの談話を分析し、分かりにくくなっている要因の一つに、学習者は代名詞の使用などで話の登場人物に対する指示詞の使用があることを指摘している。

2.3 先行研究のまとめ

以上、省略と名詞句の繰返しについての先行研究を考察したが、その結果次の3点が明らかになった。

- ①指示対象が同定しやすい場合は省略で表す(砂川 2005 ; Hinds 1983)
- ②指示対象の顕著さが低い場合「この・その」を使用しない(庵 1996)
- ③名詞句の繰返しが多用できる日本語は、指示対象が曖昧な場合は名詞句の繰返しを使用したほうがいいこと(Clancy 1980 ; 牧野 1983 他)

この3点から、日本語学習者は次の場合に指示詞を使用する可能性があることが予測される。

- ①日本語学習者は指示対象が同定しやすい場合も指示詞を使用する
- ②日本語学習者は顕著さが低い場合も、「この・その」を使用する
- ③日本語学習者は名詞句を繰返したほうが適切な場合も、指示詞を使用する

しかし、日本語学習者がこの3点の予測どおりに指示詞を使用するかどうか調査した研究は、管見では見つからなかった。そこで本稿は、この3点が OPI²⁾を資料とする KY コーパスにあてはまるかどうか特に注目し分析する。

3. 分析方法

3.1 分析データ

本稿では、OPIを資料としたコーパスであるKYコーパスと上村コーパス³⁾を用いる。KYコーパスとは、英語、中国語、韓国語を母語とする日本語学習者にOPIを行い、学習者の母語ごとに初級5名、中級10名、上級10名、超級5名、計30名、総数90名のデータを文字化した言語資料である。またKYコーパスと同じく、OPIを利用したコーパスである上村コーパスの母語話者同士の会話10名分の会話を比較対照資料として分析する。

3.2 分析方法

まず分析データから指示詞コ・ソ・アを抜き出し、形態別に指示詞使用数を算出する。次に指示詞を1) 適切、2) あまり適切とはいえない、3) 不適切と3段階で判定する。コ・ソ・アの誤用判定については、迫田（1993）の枠組みを使用した。筆者以外に日本語母語話者1名にも、3段階で判定してもらった。筆者と判定が一致した場合、その判定結果を採用し、不一致の場合、更に他の母語話者1名に判定を求め、多い方を採用した⁴⁾。そして不適切と判定された例について考察を行った。

4. 分析結果

4.1 指示詞コ・ソ・アの使用数

学習レベル別、母語別に抽出したコ・ソ・アの使用数の比率⁵⁾を出し、その比率を表1にした。

その結果、ソ系指示詞は、コ系、ア系と比べて頻繁に使用されており、特に超級レベルの学習者は母語話者より多く使用している。このことから、ソ系指示詞が学習者に過剰に使用されている可能性があると考えられる。

4.2 指示詞コ・ソ・アの誤用数

次に母語別、レベル別にコ・ソ・アの誤用判定した結果を表2に示す。コ系の表の中で、母語の下にソ・アと書いてあるが、これは、ソ系を使用すべきところにコ系を使用した誤用、ア系を使用すべきところにコ系を使用した誤用例を表す。つまり、中国語母語で中級レベルの学習者のソ系を使うべきところで、コ系を使

表1 母語別指示詞使用頻度 (文字数、人数)

コ

母語 レベル	中国	韓国	英語	日本
初級 (5 人)	2.1	0.5	0.9	6.7
中級 (10 人)	11.2	6.6	2.1	
上級 (10 人)	8.5	11.0	5.3	
超級 (5 人)	9.6	5.2	8.4	

ソ

母語 レベル	中国	韓国	英語	日本
初級 (5 人)	0.5	0.0	0.0	31.1
中級 (10 人)	9.4	6.1	13.2	
上級 (10 人)	15.7	26.0	22.8	
超級 (5 人)	33.7	47.0	33.9	

ア

母語 レベル	中国	韓国	英語	日本
初級 (5 人)	0.5	0.0	0.5	1.5
中級 (10 人)	3.3	1.3	1.5	
上級 (10 人)	2.1	0.8	2.6	
超級 (5 人)	0.8	1.2	4.5	

表2 母語別指示詞誤用出現数

コ系

母語 レベル	中国語		韓国語		英語	
	ソ	ア	ソ	ア	ソ	ア
初級 (5 人)	0	0	1	0	0	0
中級 (10 人)	19	0	3	3	1	0
上級 (10 人)	12	4	21	4	4	0
超級 (5 人)	2	0	2	0	2	0
計	33	4	27	7	7	0

ソ系

母語 レベル	中国語		韓国語		英語	
	コ	ア	コ	ア	コ	ア
初級 (5 人)	0	0	0	0	0	0
中級 (10 人)	0	1	1	0	1	0
上級 (10 人)	2	6	0	0	3	0
超級 (5 人)	3	0	2	0	7	0
計	5	7	3	0	11	0

ア系

母語 レベル	中国語		韓国語		英語	
	コ	ソ	コ	ソ	コ	ソ
初級 (5 人)	0	0	0	0	0	0
中級 (10 人)	1	11	0	13	0	1
上級 (10 人)	0	6	0	3	0	18
超級 (5 人)	0	0	0	3	0	6
計	1	17	0	19	0	25

用した誤用が 19 例ということである。

表 2 より以下の 4 点が明らかになった。

- ①初級は誤用数が少ない。それはコ・ソ・ア使用数自体が少ないためだと考えられる。
- ②コ系は、ソ系を使用するところでコ系を使用する誤用が多い。
- ③ア系も、ソ系を使用すべきところにア系を使用した誤用がどの言語も共通して多い。
- ④ソ系の誤用数は全体で 26 例であり、コ系やア系と比べると少ない。

以上の 4 点は、いずれも学習者の指示詞の誤用について横断的に研究した迫田 (1993) の結果と一致する。

4.3 指示詞を省略したほうが適切な例

次に省略したほうがいいところで指示詞を使った例を、レベル別、母語別に分類した結果を表 3 に示した。その結果、ア系は見つからず、ソ系を用いた例はコ系より多く見つかった。形態ごとにコ系とソ系が不適切に使用した例を見ると、まず「それ」が 68 例と最も多く、「これ」が 13 例、「そういう」が 12 例と続く。そこで多く観察された「それ」「これ」「この」「そういう」を取り上げ考察する。

4.3.1 「それ」を省略したほうが適切な例

指示詞「それ」を省略したほうがいいと観察された例は、(ア) 直前の語を指示する例 (イ) 指示対象が不明瞭な例 (ウ) ほかの表現が適切な例 (エ) 指示対象が同定しやすい例 (オ) 指示詞を連続で使用している例、の 5 種類に分類できた。それぞれの例を見ていく。

表 3 母語別、指示詞の不適切（省略）に使用された数

コ				ソ				ア			
	中	韓	英		中	韓	英		中	韓	英
初	0	0	0	初	0	0	0	初	0	0	0
中	6	0	1	中	10	8	2	中	0	0	0
上	1	7	1	上	20	12	9	上	0	0	0
超	0	0	3	超	2	23	5	超	0	0	0
計	7	7	5	計	32	43	16	計	0	0	0

(ア) 直前の語を指示する例

- (3) ジャスコに行って、からあげとか、あの、ラーメン、ここで300円ぐらいだから、コンビニストアで買うより安いですから、それでラーメンとか、それ、買って、作って、食べようかと思ったんです (韓国語上級)

(3) の「それ」は、「ラーメン」を指示しているのではないかと考えられるが、母語話者は直前の語を指示することはないので、不適切だと考えられる。

(イ) 指示対象が不明瞭な例

- (4) えー最近、あのー、サリン事件あって、だからあのー、オーム真理教のいろいろ、なんか、警察はやってますね、んー、それ、なんか今は、麻ひやら教祖とか、たいは、いろいろ、あのー、オーム真理教の幹部を逮捕されて、まだ続けていますね、(中国語中級)

(4) の「それ」は前後の文脈と関係なくフィラーのように用いられており、母語話者が「それ」をフィラーとして使用する例は観察されない (山根 2002) ことより、省略したほうがいいと思われる。または「その」に換えるとフィラーとして用いられるので、形態選択の不適切さとも言える。

(ウ) ほかの表現が適切な例

- (5) T⁶⁾: んーあーそうですか、にほんは初めてーなんですネ

S: はい、それーが、おー、夜、わたし一人で、んわたしの部屋へ、ある時は、ちょっと、さびしいです、友達と、おいく、友達と、お生活する時は、あおもしろいです (韓国語中級)

- (5)' S: はい、それで、夜、わたしひとりで、部屋にいたときは、ちょっとさびしいです。

(5) の「それ」は指示対象が不明瞭であるが、(5)'⁷⁾ のように「それで」「だから」など理由を表す接続詞に換えたほうがより適切であると思われる。ほかにも同様の例が見つかった。

(ア)(イ)(ウ) は、それぞれ語彙レベルの問題であり、「それ」を使用することで、分かりにくい文になっており、許容しにくい例である。

(エ) 指示対象が同定しやすい例

この例は、先行研究であげられた「指示対象が同定しやすい場合でも指示詞を

用いる」例であるが、さらに自分が発言した語、文を指示している例と、相手の発言を指示している例の2種類に分類できた。

a) 自分が発言した語を指示する例

(6) の例は、趣味の切手集めが話題となっており、切手集めを指示して「それ」を使用しているので、指示対象が同定しやすいため、(6)' のように省略したほうがより適切だといえる。

(6) T: ちょっとあの話題が変わるんですけれ〈くん〉ども一、Sさんは、えー
ご趣味はなんですか (中略)

S: あの一、わたし、子供のころはね、切手集めしてたんです、もう
遠い前に、それは、わたしとしてはしてませんけれど、わたしは、
その、えーやっぱり それが喜ぶ人がおる、だからその、切手を集
めてやってはですね、そして、さん400枚、たまるとですね、あの、
そういう人にやる、送るんです (英語超級)

(6)' S: わたしは、やっぱり喜ぶ人がいる、だからその、切手を集めてやっ
てはですね

b) 相手の発言を指示する例

(7) の「それ」は相手が発言した「向こうでの仕事」を指示しているのだが、トピックが明瞭であるので、省略したほうがいいと思われる例である。

(7) T: あの一じゃSさんは向こうでなんか仕事をやってたんですか

S: あ一、それは、お父さんの一、仕事手伝います (中国語中級)

(7)' S: あ一、お父さんの仕事、手伝います

(オ) 指示詞を連続で使用している例

この例は、「それ」が使われている文だけを見ると文法的に正しいのだが、「それ」を使う頻度が多く、指示対象がそれぞれ異なっているため、不適切に感じる例である。

(8) T: (トレンディドラマは) 出てくる、なんていうの、人たちのファッションとかね、うん、なんか現実からちょっと離れてるって感じもしない

S: なるほどね、まあ、①それはそうだと思う、だいたい映画もそうだ
と思うし、②それは、あの一、ましょうがないっていうか、そうね、

やっぱり、いい面もあれば悪い面もあると思うし、その、あの、確かに、あの、そのイメージが、あの、たとえば若い人がそれみ、③それを見たら、あー、私も、あの、お金をほしいとか、わー、お金がないから、それでさみしくなるとか、④それはよくないと思うね、⑤それは確かに、その、あの、欠点もあると思うけど、(英語超級)

①の「それ」と②の「それ」は、前のTの発言を指示しており、③の「それ」は、トレンドドラマを指示している。また④の「それ」は点線の下線で示した箇所、直前の自分の発言を指示している。⑤の「それ」は、④と同様点線の下線で示した箇所もしくはトレンドドラマを指示していると思われるがはっきりしない。この中で⑤の「それ」は指示対象が不明瞭であり、④と指示対象が同じであるならば、指示対象が同定しやすいので省略したほうが適切だといえる⁸⁾。

4.3.2 「これ」を省略したほうが適切な例

次に「これ」を省略せずに使用した例を観察したところ、上記の例のうち(A)

(イ)(エ)の例が観察された。その中で、(A)と(イ)の例をとりあげる。

(A) 直前の語を指示する例

(9) わたしはちょっと、おかしいな—と思っていますけど、いつも一、あ女の人の裸とか一、これがよく出る、とまた男の人と一、パンツも着てないし— (韓国語上級)

(イ) 指示対象が不明瞭な例

(10) T: へえ、それではSさんもそういうちあのパーティーの洋服なんか持ってますか

S: あー、これパットのゆうふく一ひとつ、持っていますねー

(中国語中級)

(A)の(9)で使用される「これ」は「女の人の裸」を指示しているようであるが、「それ」と同様、日本語母語話者は直前の語彙を指示対象とする指示詞を使用しないため不適切である。また、(イ)の(10)も指示対象が不明瞭であり、Tの質問に対して答える時間稼ぎをしているフィラーのように「これ」を使用しているが、母語話者はフィラーとして「これ」を使用しない(山根 2002)ので不適切である。

4.3.3 「この」を省略したほうが適切な例

次に「この」が用いられたところで省略したほうがいい例を考察する。「この」は（ア）顕著さが低い例と、（イ）新情報に使用する例の2種類に分類できた⁹⁾。

（ア）顕著さが低い例

これは、庵（1996）から考えられた例であり、トピックが形成するフレームの中で、顕著さが低い場合指示詞が使用されないのだが、学習者は使用した例である。（11）は、韓国の大学と比較して、日本の大学制度について述べているが、「研究室」は特定の研究室を指しているわけではないので、ここでは省略したほうがより適切だと思われる。

（11） T：じゃあ、ほかの例えば化学とかね、そういうあの研究室が必要な人たちとかは一、大学す、4年生の時はどうするんですか

S：んーわたしの、友だち、も、この研究室にいれずに、ほかの、かく部の人だち分からないかしー、知る人がないからー、も、あんまり分からないんですけどー多分、ん多分自分で、うん、やるんじゃないかなーと思います（韓国語上級）

（イ）新情報に指示詞を使用する例¹⁰⁾

（12）は、新しい情報であるSの「友達」に「この」を使用している例である。ここでも省略したほうが適切だと言える。

（12） S：えー、あの、いい映画、あの、映画を、一緒に、あの、みません

T：あ、いいですね、あのーどんな映画ですか

S：あのね、あのーいらいひとという映画が、あの、あの最近あの、出ました、あのー、この友達が、あの見に行った、の、ほんとに、見なければならぬいもんですから（英語中級）

4.3.4 「そういう」を省略したほうが適切な例

省略したほうがいい「そういう」は「それ」の（オ）の例のように、指示詞を多用し、何を指示しているか分かりにくくなっている例が見られた。

（13） あ、韓国も今、やはりあの福祉関係の、①そういう問題とか、②そういう社会的な③そういう環境問題とか、そっちの方にかなり、ま、目があの、向いていってますから、あの、だんだんと良くなると思います（韓

国語超級)

①の「そういう」は直前の「福祉関係」を指示していると考えられるが、②と③の「そういう」は指示対象がはっきりせず分かりにくいので省略したほうがいいと考えられる。

4.3.5 省略に関するまとめ

以上、省略したほうがいいところで指示詞を使用する例を観察した。その結果、明らかになったことをまとめる。

(1) ソ系指示詞を省略したほうが適切な例の多用

指示詞を省略すべきところで使用する例は、段落レベルで話せるようになる上級レベルになってから多く観察された。またソ系、特に「それ」を使用しているが省略したほうがよい例が他の形態より多く見つかった。

(2) 省略したほうが適切な「これ」「それ」の種類は5種類に分類

まず語彙レベルの例、談話レベルの例に分けられ、前者は結束性の問題ではなく、フィラーのように使用していた例である。後者は先行研究で示された例で、文法的には正しいが、「それ」を使うことで分かりにくさが生じる例である。語彙レベルの例を、さらに指示対象によって、(ア)直前の語を指示する例、(イ)指示対象が不明瞭な例、(ウ)ほかの表現が適切な例の3種類に分類した。また談話レベルの例では、(エ)指示対象が同定しやすい例と(オ)連続で使用しているために分かりにくくなっている例が見つかった。さらに、(エ)指示対象が同定しやすい例は、指示対象によって2つに分類した。

以上の用法を図1に示し、それぞれの用法別レベル別に観察された数を表4に示す。表4より語彙レベルの例は、談話レベルの例より不適切な用法が多く観察され、(オ)の指示詞を連続して使用して分かりにくくなっている例は、段落レベルを話すことができる上級レベル以上に観察された。

(3) 「この」「その」を省略したほうが適切な例

先行研究でとりあげられた「顕著さが低い場合も指示詞を使用する」例のほかに「新情報に指示詞を使用する」例が観察された。

(4) 「そういう」の過剰使用

上級レベル以上の学習者のうち「そういう」が母語話者よりも多く使用してい

(ア) 指示対象が不明瞭である例

(14) S: あの一あ一、sports tabloid、いつも貴とりえ、のことがあ一書きます、
でも、ちょっとつまらない

T: そうですね、どうして、つまらないんですか

S: あ一、んーと、あの、その人は、じょ average でしょう、あの一宮
沢りえはかわいいだけ (英語中級)

(14)' S: あ一、んーと、宮沢りえは、average でしょう

(14) の「その人」は「貴」か「りえ」かどちらを指示しているか分からず、
あとで、「宮沢りえはかわいいだけ」とあるので、おそらく「りえ」を指示して
いるのだろうが、不明瞭であるため、(14)' のように「宮沢りえ」を繰り返した
ほうがより適切だといえる。

(イ) 指示対象が話の中心になっている例

次の例は、映画のあらすじを話しており、文中から「その人」は話の中心であ
る「死体」を指しているようだが、「その人」を使用すると、別人物を指示して
いるようであるため、ここでは「死体」を繰り返したほうがいい。

(15) 最後は死体を発見したんだけどー、それを一なんか、うん一、なんか土
で、埋めーるんですね、このなん警察に一連絡じゃなくて、その人と一
埋めて、なんか、ゆっくり寝なさいとか言って、全部帰ってくるんです
4人が、(韓国語上級)

5. まとめと日本語教育への応用

以上、日本語学習者がいかなる場合に不適切となる指示詞を使用するか、特に
先行研究であげられた3点の成果を学習者は使用しているかどうか調査するた
め、日本語学習者の話し言葉資料である KY コーパスを分析した。その結果、学
習者はソ系を多く使用しており、先行研究であげられた3点を支持する例と、そ
のほかの不適切な指示詞の例も観察された。以下明らかにしたことをまとめる。

- (1) 指示対象が同定しやすい場合も指示詞を使用する
- (2) 指示対象の顕著さが低い場合でも「この・その」を使用する
- (3) 話の中心になっている場合でも指示詞を使用する

- (4) 指示対象が不明瞭である場合でも指示詞を使用する
- (5) フィラーとして使用できない指示詞の形態「これ」「それ」「そういう」をフィラーとして使用する

先行研究であげられた3点(1)～(3)は、(4)や(5)と比べるとそれほど不適切な例が見つからなかった。この結果について考えられることは、(1)についていえば、学習レベルが低い学習者でもゼロ代名詞を使用している(中浜 2004)ことが不適切な例が少なかった原因かと推測する。また、(3)については、日本語レベルが低い学習者が名詞句の繰返しを多く使用する(中浜 2004)ことから、指示詞を回避するほうが、同じ名詞句を繰り返すことより学習者にとって負担にならないことが原因ではないかと考えられる。

また本稿で明らかになったことから、日本語教育における指示詞の指導を考える場合は、コ・ソ・アの選択という問題以外に次の点に注意したほうがよいことが指摘できる。

- (1) 指示対象が同定しやすいものは指示詞を省略すること
- (2) 顕著さが低い指示対象には「この・その」を使用しないこと
- (3) 話の中心となっている名詞句は繰り返してもいいこと
- (4) 指示対象が不明瞭な場合は指示詞を使用しないこと(名詞句を繰り返してもいいこと)
- (5) フィラーとして使用できる指示詞の形態に注意すること

しかし本稿の問題点が2点ある。まず、「不適切」の定義があいまいであり、少数の母語話者が判定した多数決の結果決めているため、母語話者によりゆれがあると言える。2点目に、学習者が不適切に指示詞を使用する要因のひとつとして、母語の転移が考えられるが、本稿で使用したKY コーパスは、フォローアップインタビューができないため要因を探ることはできなかった。

今後の課題として、本稿では指示詞に注目し、不適切な使用の要因について考察したが、指示詞使用を回避したために、文が不明瞭になっている例も観察されている(浅井 2006; 藤森 2005)ので、今後は、指示詞使用の回避の要因なども考察していきたい。

註

- 1) 庵(2007: 205)によると、テキスト言語学(text linguistics)とは、「テキストに関わる現象を言語に関する視点から分析することを目的とする研究分野」と定義している。また庵(1998, 2007)では書き言葉を対象として分析しているが、ハリデイ & ハッサン(1997)など書き言葉に限定しておらず、話し言葉も分析している。
- 2) OPIとは、「oral proficiency interview(オーラル・プロフィシェンシー・インタビュー)」の頭文字で、外国語学習者の会話のタスク達成能力を、一般的な能力基準を参照しながら対面のインタビュー方式で判定するテストである。
- 3) 上村コーパスは米国プリンストン大学の学生および現地在住の日本人14名と、国際基督教大学の在学学生と学外の社会人40名を被験者にOPIテスト形式に沿って会話を行い、そのデータを収録したものであり、<http://www.env.kitakyu-u.ac.jp/corpus/>で公開している。
- 4) 母語話者3名の判定で決めることとなり、信頼性にかける問題がある。
- 5) KYコーパスは、鎌田(2006)によるとひとり20～30分の長さであることが報告されているのに対し、上村コーパス10名分はひとり平均18分である。インタビューを文字化した資料の文字数を調査すると平均初級4228字、中級8146字、上級10629字、超級11,593字、上村コーパス9706字と、インタビュー時間が異なることが予測された。そこで1会話の文字数を1万字に揃え、比率を出した。
- 6) SはOPIの被験者(ここでは学習者)を表し、TはOPIのテスター(日本語母語話者)を表す。
- 7) 筆者が作成した例である。
- 8) ③も不適切だといえるが、③の場合は指示対象が不明瞭であるため、省略ではなく、指示対象を繰り返したほうがよい。しかし名詞句を繰り返したほうがいい「それ」については本稿では取り扱わない。阪上(2006)を参照のこと。
- 9) 「その」も「この」と同様2種類に分類できたが、「その」はこちらが予測したほど見つからなかった。というのも分析データは、音声データを公開していないKYコーパスを利用しているため、フィラーか指示詞か判別がつきにくく、分析対象外にしたものが多いのも一因だと考えられる。
- 10) この例は、「その」にも観察できたのだが、渡邊(1996: 128)は、ドイツ語母語話者が使用すべきでない箇所でソ系指示詞「その」を多用しており、その原因は母語の定冠詞の影響があるのではないかと指摘している。
- 11) 母語別・レベル別に分類した名詞句を繰り返したほうがいい指示詞について、本稿では取り扱わない。阪上(2006)を参照のこと。

参考文献

- 浅井美恵子（2006）「日本語の論説的文章における指示詞「この」「その」—日本語母語話者と日本語学習者の使用の比較—」『言葉と文化』7号 pp. 141-150
- 庵功雄（1996）「指示と代用—文脈指示における指示表現の機能の違い—」『現代日本語研究』3号 大阪大学 pp. 73-91
- 庵功雄（2007）『日本語におけるテキストの結束性の研究』くろしお出版
- 岡部寛（1994）「「こんな」類と「こういう」類」『現代日本語研究』1号 大阪大学 pp. 57-74
- 梶原真樹子（2006）「ナラティヴにおけるトピックの導入・維持に関する考察：日英言語比較を通して」『信州大学経済学論集』54号 pp. 87-92
- 鎌田修（2006）「KY コーパスと日本語教育研究」『日本語教育』130号 日本語教育学会 pp. 42-51
- 阪上彩子（2002）「ハンガリー人の日本語学習者における指示詞習得過程」『STUDIUM』30号 大阪外国語大学大学院研究室 pp. 68-79
- 阪上彩子（2006）「日本語学習者の指示と繰り返し —KY コーパスを利用して」『日本語・日本文化研究』大阪外国語大学日本語講座 pp. 173-182
- 迫田久美子（1993）「話し言葉におけるコ・ソ・アの中間言語研究」『日本語教育』81号 日本語教育学会 pp. 67-81
- 迫田久美子（1998）『中間言語研究—日本語学習者における指示詞コ・ソ・アの習得』溪水社
- 砂川有里子（2005）『文法と談話の接点—日本語の談話における主題展開機能の研究—』くろしお出版
- 孫愛維（2008）「第二言語及び外国語としての日本語学習者における非現場指示の習得—台湾人の日本語学習者を対象に—」『世界の日本語教育』国際交流基金 pp. 163-184
- 中浜優子（2004）「二言語としての日本語の物語発話における指示対象のトピック管理の発達パターン」南雅彦・浅野真紀子（編）『言語学と日本語教育3』くろしお出版 pp. 77-96
- ハリデイ & ハッサン著 安藤貞雄他訳（1997）『テキストはどのように構成されるか』ひつじ書房 Halliday, M.A.K. & Hasan, R. (1976) *Cohesion in English* Longman.
- 藤森弘子（2005）「結束性の観点からみた初級日本語学習者の作文」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』no. 31 pp. 95-109
- マッカーシー, マイケル著 安藤貞雄・加藤克美訳（1995）『語学教師のための談話分析』大修館書店 McCarthy, M.J. (1991) *Discourse Analysis for Language Teachers*. Cambridge University Press

- 牧野成一 (1983) 「省略と反復」 中村明編『講座日本語の表現 5 日本語のレトリック』筑摩書房 pp. 73–87
- 山内博之 (2005) 『OPI の考え方に基づいた日本語教授法』 ひつじ書房
- 山根智恵 (2002) 『日本語の談話におけるフィラー』 くろしお出版
- 渡邊亜子 (1996) 『中・上級日本語学習者の談話展開』 くろしお出版
- Clancy, P.M. (1980) Referential choice in English and Japanese narrative discourse. *In The Pearsotries*, ed. by W. L. Chafe, Norwood, NJ pp. 127–202.
- Hinds, J. (1983) topic continuity in Japanese. *Topic Conuity in Discourse: A Quantitative Cross-Language Study*, ed. by T. Givón, Amsterdam pp. 43–93.
- Hinds, J. (1986) *Situation vs. person focus* Kuroshio Tokyo.
- Kondo, J. (2004) Japanese Learners' Oral Narratives: Linguistic Features Affecting Comprehensibility. *Japanese—Language Education around the Globe—* Vol. 14 Japan Foundation. pp. 53–74.
- Nariyama, S (2003) *Ellipsis and Reference Tracking in Japanese* vol. 66 of Studies in Language Companion Series. Amsterdam: John Benjamins.

謝辞：本稿の執筆にあたり、大阪大学の鈴木睦先生、査読委員の方々に貴重なご助言をいただきました。この場を借りて心よりお礼申し上げます。

〈キーワード〉 指示詞、省略、繰り返し

The Inappropriate Use of the Demonstratives for the Japanese Learners' Spoken Language

Ayako SAKAUE

A number of researches have examined the demonstratives, but as far as the studies of the demonstratives of Japanese learner is concerned, the ones about classification of demonstratives KO·SO·A are most commonly found (Sakoda 1998). However, actually, other elements, for example ellipsis or repetition of object make them inappropriate (Sakaue 2003).

The aim of this paper is to clarify the characteristics of inappropriate demonstratives that Japanese learners use; when and how many times which demonstrative the Japanese learners use and why they are inappropriate. As a result of the examination, the demonstratives which need to be omitted the most are “SORE”. The result of the present study shows the importance and need of referential forms including ellipsis and repetition not only the choice of the demonstratives.

When it comes to the way of teaching the demonstratives, it should be careful about the next points besides the choice of the demonstratives.

- (1) You should omit the demonstratives which have a clear discourse topic.
- (2) You shouldn't use “KONO” and “SONO”, it's difficult to guess what the demonstrative reference is.
- (3) You can repeat the noun phrase when that plays a key role of the story.
- (4) You shouldn't use the demonstratives when it's difficult to guess what the demonstrative reference is.
- (5) You should be careful that the demonstratives can use as filler or not.